【書評】

中村三春著『花のフラクタル 20世紀日本前衛小説研究』

山﨑義光

巨視的フレームのなかにテクストを位置づけ、微視的にテクスチャーを読み解く小気味良さに、ついつい取り上げられた〝文芸作品〟を読み返したくなる。分析はクールでありながら、テクストのもつ文芸性をあの手この手で汲み取ろうとする意志がそこにある。本書で展開される研究の魅力は、まずそういう点にあると思う。

本書の全体に目配りした書評は、すでに他誌に掲載されている。中沢弥（『日本文学』二〇一二・九）、松本和也（『昭和文学研究』二〇一二・九）、野中潤（『日本近代文学』二〇一二・十一）の諸氏による書評である。また、本会会報にも古矢篤史による新刊紹介（『横光利一文学会会報』二〇一二・七）がある。ここでは、本書の内容全体に目配りして論評することとより、横光利一研究という文脈を把持しながら、本書が追求する目的と方法、中村三春的研究フレームについて考えてみたい。

「20世紀日本前衛小説研究」との副題が付されているが、「20世紀」のうちでも、一九二〇—三〇年代に活躍した作家・作品をおもな対象としている。そして、最終章のオムニバスをのぞけば、ゆるやかに年代順に配列されているとみることができる。ただし、年代論的な観点は背景にすぎない。前景にあるのは「前衛小説」の方である。ジャンルとしては「小説」を中心に据え、「文芸技術の可能性の広がり」（一二頁）を示すテクストをとりあげる。言葉の芸術としての「前衛（アヴァンギャルド）」にかかわると認定しうるテクストを対象とする。

とりあげた作家・作品は多岐にわたる。本書は、二十二編におよぶフラグメントとしての論文で構成され、どこからでも読める。久野豊彦、横光利一、堀辰雄、太宰治、森敦。その他、江戸川乱歩、中河與一、葉山嘉樹、小林多喜二。これらの作家・作品は、人的交流や流派、テーマや題材、思想や倫理、影響関係といった次元で論じられる場合、従来必ずしも関連づけて論じられてこなかった。

各論文は、アヴァンギャルド性という共通性によって点綴

される。それぞれのテクストは、その固有性において読まれ、様式的特質の分析によって評価される。アヴァンギャルド性の兆候を、フラグメント、モンタージュ、フラクタル構造、メタフィクションといった術語で指示しつつ、ジャンル的特長や、電報文体、書簡体、アフォリズムなどの文体がテクストに編み込まれていることに目配りされ、あるいは都市や身体が言葉によって創造されていくさまを、テクスト分析、また他のテクストとの比較対照によって論じ、文芸テクストとしての可能性において評価する。

野中も指摘したように、「前衛（アヴァンギャルド）」という用語は、同時代的に言えば、必ずしも芸術様式の革新運動を指すばかりではない。むしろ一九二〇—三〇年代の時点でいえば、横光をはじめとする芸術派と対立関係にある、プロレタリア文学派に対してこそ用いられていたとすら言いうる。本書は、そうした日本における同時代的な背景、プロレタリア文学派と芸術派を相反し対立する関係において理解する文学史的通念、とりあげられた個々の作家たちの自覚や意図とは必ずしも合致しない、彼らが立っていたのとは異なる視覚、いわば空中撮影的視覚から、芸術的前衛（アヴァンギャルド）の二十世紀的世界性というゆるやかなフレームに収める。久野豊彦を論じた最初の章において、そうした視覚がまずもって提示されている。そのうえで、とりあげたテクストそれぞれのもつテクスチャーを前景化し、同時代的な言説というフレームに埋没させてしまう危機から、いま現在においても読んで生き生きとした言葉の身振りを味わい摂取しうる可能性を解放しようとする意志を看取することができる。

それにしても、「20世紀」「前衛小説」という副題が示す「研究」の射程には、読後、偽りや誇張を感じさせない。それは、論じ尽くされているからではなく、研究目的の照準が明確であることに支えられている。テクストがどのように織り上げられているかへの照準。「テクスト様式論」がそれである。

各章は作家名によって括られている。個々のテクストの分析から明らかにされる様式は、作家の文芸観を示す評論と対照される。また、それ自体様式をもつエッセーと関連づけられる。作家の思想が論じられる場合も、いかなるテクスト実践に結びついているかという観点からはずれない。

そうした「フレーム」のなかに、横光のテクストも投じられている。その部分に焦点をあわせて確認してみよう。横光テクストが論じられた章は「横光利一　ポストモダン」と題される。

「Ⅰ横光利一の文化創造論」では、横光の文化論を「記号主義・虚構主義」的な文化創造論であると論じる。戦時下において「脱西洋へ向かい」、神秘主義的な東洋主義、日本主義のイデーに接近し、民族主義、国家主義的言説の「創造」

とむすびつくことにもなったが、その帰結をもって横光の文化創造論を過小評価することには否定的である。

続く四つの節は、個別テクストの様式論である。「Ⅱ逃走するエクリチュール　『上海』『浅草紅団』のフラグメント性」では、都市小説として受けとられてきた二つの小説をとりあげて対照し、アヴァンギャルドとしての共通性を見出していく。実際に今でもそこへ行くことも、歴史探訪することもできる都市としての上海や浅草がまずあって、それが小説テクストに反映するのではない。言葉による都市像がどのようなテクスト様式において創造されているかを、二つのテクストを対照しつつ共通性を見出して論じる。フラグメントとモンタージュが『上海』では多面体的な語りに、『浅草紅団』ではルポルタージュ形式のうちに導入され、「直線的で定型的な物語形式に反発し、物語の要素を含みながらも、読者がその都度テクストの表面に停滞し、言葉を新たに自分のものとして実感することを可能にするような条件を模索した」「逃れ去るエクリチュール」である点に共通の特質をみる。

「Ⅲ変異する純粋小説　『天使』の構造と攪乱」は、自己決定能力をもたない人物群が、結婚をめぐる関係の函数として配される。それゆえに、家父長制、結婚などの枠組みや倫理を骨抜きにしているとみる。実体的な自意識の形象、社会的規範や対人関係における倫理といった観点からは否定的に評価されがちなこの小説テクストを、様式的特質の観点から分析することで、否定的に評価してきた評者達の暗黙の前提をこそ問い返すテクストの性質を説き明かしている。

続く、「Ⅳ非晶質（アモルファス）なテクスト　『紋章』の文体と逸脱」においても、そのような観点が共通している。従来の『紋章』論が語りの混乱として否定的に評価してきた点について「混乱しているように見えるのならば、混乱なるものがこのテクストのスタイル（様式）であると言えば済むことである」と言い切る。『寝園』『花花』『盛装』などの純粋小説群に共通する「シーソー式の連動原理」「関係論的な構造」に加えて、このテクストは「他の純粋小説のテクスト以上に変幻する語りのスコープ」をもち、「書くことへの言及」を前景化した「非晶質なテクストの運動」であることに「あやしい魅力の源」があると評価する。

「Ⅴ幻像のポストモダン　『旅愁』とメタテクストとしての『欧洲紀行』」では、小説『旅愁』が第三編以降矢代と語り手による理念的言説に傾くのに対して、むしろ旅日記である『欧洲紀行』の方が、フラグメントとしてのアフォリズム集の様相を呈し、メッセージを一義的に主張するよりも多義的で含蓄の深い文芸性を備えていると対照する。こうした逆説的な対照から、『旅愁』に対するメタテクストとして『欧洲紀行』を位置づけ、ありえたかもしれないもう一つの『旅愁』の可

能性を指摘する。それは横光テクストから理念や倫理を抽出して評価する観点を相対化し、横光テクストの文芸性が含みもつ可能性に照準して評価するためである。

本書でとりあげられたテクスト個々の具体的な分析、論点については議論の余地は残されるだろう。小説は、読み手がどのような解釈フレームを持ち込むかによって、いくつかの多元的な解釈を可能にする。そのことを十分に踏まえつつ、文芸性（テクスト様式）に徹底して限定して照準する態度が貫かれている。

「文学研究」はどのようなフレーム（フレーム）にのっとって行われているか、行われるべきかは、多様でありうる。本会の大会、研究集会での発表、シンポジウム等、そして『横光利一研究』に掲載された論文それぞれにおいて目的や方法は多様であり、そうであってよい。研究の独創性はどのような文脈を選択し設定するかにこそある。たとえば、横光が生きて活動した同時代の都市や社会現象や思想という文脈。先行言説との間テクスト性という文脈。横光の思想・行動という文脈。典拠や影響という文脈。メディアや文壇という文脈。あるいは、ジェンダーやナショナリズムなど社会的倫理的な価値をテーマとし、それをテクストのなかに探るという文脈もある。それらの文脈のなかでの評価を多くの研究が帰着点とする。

それに対して、「文学研究」の場が縮小され斜陽の学問ともみなされる今にあって、実のところ「文学」を言葉の芸術として照準し、テクスト様式論として展開することは、思いの外、数少なく孤高ですらあるかもしれない。かといって、それだけが文学研究の正しいあり方で、それ以外が邪道なのでもない。「文学」という括りそのものもまた根本的にみなおされるべき歴史性をもった概念である。しかし、本書が示したのは、「文学」が多様な文脈を許容しながらも研究に価する独自の領域であり、考究に価する対象であるとすれば、その基底は、一筋縄では汲みつくし得ない他者性を保持しつづけるテクストのテクスチャーと向きあうことにあり、言葉の芸術、技術であるところの文芸性への着眼にあるという一事なのではないか。

（二〇二二・一・二〇、翰林書房、三九九頁、定価三八〇〇円＋税）